

動作訓練と行動発達

Learning of Voluntary Motor Control Behavior Modification

里見達也

目次

公開講座参加者の課題意識に関する研究.....	88
-------------------------	----

公開講座参加者の課題意識に関する研究

里見 達也

I. 問題と目的

村田(2005)は、動作法を学ぼうとする際に、「目に見える技法にのみにとらわれて、その技法の背景にある考え方がなおざりにされ」やすいのではないかと問題提起をしている。同時に「その技法に習熟しない限りは、実際の指導にほとんど役立てることが出来ない」ことも指摘している。

佐藤(1996)は、「脳性まひ児の発達過程における動作学習の困難に関する分析」の中で、「設定される訓練課題は訓練効果を大きく左右する」ことを指摘した上で、「訓練課題を見立てる上では、訓練技法の知識はもとより臨牀的な実践から得られる様々な経験的知識が欠かせない」としている。

大神(1988)は、実際の臨床場面で訓練課題を設定する際には、体系的な分析資料に基づいた手続きがとられておらず、多くの場合熟練者の経験に依存した方法がとられてきた現状を鑑み、これまでの知識を整理する方法論的検討を加えながら体系的な資料の整理や再編をする必要があることを示唆している。

筑波大学公開講座「障害児に対する動作法実習」は「盲・聾・養護学校において自立活動に関心をもつ教員を対象とし、動作法の理論と技法、並びその自立活動指導への活かし方について学習することを目的」に毎年開催している。

本研究では、筑波大学公開講座の参加者が、どのような課題意識をもって参加しているのかを探りながら、的確な課題設定に至る理論とその技法の修得を目的とした今後の公開講座のあり方について、探求するものである。

II. 方法

1. 調査対象の概要

平成15・16・18年度筑波大学公開講座「障害児に対する動作法実習」(2日間)の参加者124名に、「動作訓練研修シート」を配布し、公開講座を受講するに当たっての動機・目的や具体的な研修課題を記入してもらい、公開講座終了後に、参加目的の達成度や研修課題の達成状況を自己評価してもらった。

(1) 回収率

本公開講座参加者124名に対し、116名の回収があった。有効回収率は、93.5%であった。

(2) 所属

養護学校勤務が110名で、その内訳は肢体不自由養護学校勤務が89名(76.7%)、知的障害養護学校勤務が21名(18.1%)であった。その他に、中学校・児童相談所

や知的障害者入所施設勤務などが6名(5.2%)であった。

(3) 動作法の経験

動作法の経験が無い初心者は87名(75.0%)、動作法経験者29名(25.0%)で、その内訳は、1年から4年までの経験者は27名、10年以上の経験者は2名であった。

2. 講義内容

本公開講座での講義内容は以下の通りである。

(第1日目)

- ・動作法の理論
- ・動作訓練の方法(モデルパターンと訓練の実際)

(第2日目)

- ・運動障害児、行動障害児等への指導
(動作特徴と計画・訓練の進め方の実際)
- ・養護学校現場での活かし方と研修

3. 調査方法

動作法の経験が無い初心者群と動作法経験者群の2群に分けて、以下の視点で整理し、2群を比較した。

- (1) 参加の動機・目的と達成状況(自由記述)
- (2) 具体的な研修課題と達成状況(3つを自由記述)
- (3) 動作訓練内容のうち、重点的に研修したい内容と研修できた内容(11項目から自由選択)

III. 結果と考察

(1) 参加の動機・目的と達成状況

本公開講座への参加の動機について整理してみると、動作法の経験が無い初心者群は、主に、「自立活動の時間など授業に活用したい」と「動作法の基礎的な知識や訓練法を学びたい」とするものが多かった(Table 1参照)。

Table 1 参加内容の動機・目的
(動作法経験の無い初心者群)

参加内容の動機・目的	取り上げた人数 72 (%)
a. 自立活動の時間など授業に活用	36 (50.0)
b. 基礎的な知識及び訓練法の習得	19 (26.4)
c. ポート作りやコミュニケーション活動への反映	6 (8.3)
d. 自閉的な傾向をもつ子どもに対しての動作法の方法	6 (8.3)
e. 教師の力量や専門的な知識の習得	5 (7.0)

※2人以上の方が取り上げた視点を筆者がまとめたもの

一方、動作法経験者群は、「基本的な理論や知識、技能の習得」が大半であった(Table 2参照)。

Table 2 参加内容の動機・目的（動作法経験者群）

参加内容の動機・目的	取り上げた人数 20 (%)
a. 基本的な理論・知識や技能の修得	13 (65.0)
b. 肢体不自由児以外の子どもへの指導	4 (20.0)
c. 動作課題を把握するための方法の習得	3 (15.0)

※2人以上の方が取り上げた視点を筆者がまとめたもの

これらから、動作法経験の無い初心者は、明日にでも授業に活用できる方法を得るために本公開講座に参加している傾向があり、動作法経験者は、基本的な理論・知識や技能を再確認するために参加している傾向がうかがえる。

また、本公開講座を受講した後に記入された、当初の参加目的の達成状況を整理してみると、動作法の経験が無い初心者群では、大半が半分以上達成されたとしているものの、約2割が手がかり程度の達成感や未達成感を感じている（Table 3参照）。

Table 3 参加目的の達成状況（動作法経験の無い初心者群）

参加目的の達成度	人数 (%)
a. 大部分達成	53 (60.9)
b. 半分達成	18 (20.7)
c. 手がかり程度の達成	9 (10.4)
d. 未達成	7 (8.0)

※記入された視点を筆者がまとめたもの

一方、動作法経験者群についても、大半が半分以上達成されたとしているものの、約2割が手がかり程度の達成感や未達成感を感じている（Table 4参照）。

Table 4 参加目的の達成状況（動作法経験者群）

参加目的の達成度	人数 (%)
a. 大部分達成	18 (62.1)
b. 半分達成	7 (24.1)
c. 手がかり程度の達成	3 (10.3)
d. 未達成	1 (3.5)

※記入された視点を筆者がまとめたもの

これらから、本公開講座は、参加者の目的をおおよそ達成できるような内容になっていることがうかがえる。

しかし、未消化のままで終わってしまっている参加者の中で、その詳細を見てみると、「難しく、なんとなく理解した程度」で、「実際に現場に戻ったときにどのような目的でどんなふうに取り入れるのか」という具体的な考えがまとまらなかった」という意見や、「取り入れて

みたいが、まだまだ不安」,「実技の説明に消化不良あり」といった意見が書かれていた。

これらから、動作法を実際に取り入れる際の目的や方法をより詳しく伝えていくことが望まれていると思われる。

(2) 具体的な研修課題と達成状況

具体的な研修課題を整理してみると、動作法の経験が無い初心者群は、主に、「動作法とは何か」という目的や意義について、また養護学校現場での活かし方についても研修課題としている場合が多かった（Table 5参照）。

Table 5 具体的な研修課題（動作法経験の無い初心者群）

具体的な研修課題	取り上げた人数 197 (%)
a. 「動作法とは何か」という目的や意義	47 (23.9)
b. 養護学校現場での活かし方	22 (11.2)
c. 子どものペースに合わせた無理の無いかかわり方	20 (10.2)
d. 動作法の実技（訓練の実際）を学ぶ	20 (10.2)
e. 子どもの問題点の見方を知る	13 (6.6)
f. 身体について子どもの課題のとらえ方	12 (6.1)
g. 訓練方法	10 (5.1)
h. どう援助すると体が動くのか	9 (4.6)
i. リラクゼーション	9 (4.6)
j. 動作法の体験	8 (4.0)
k. 自立活動への活用	8 (4.0)
l. コミュニケーション	6 (3.0)
m. 自閉症児への対応について	5 (2.5)
n. 評価の仕方	5 (2.5)
o. 体を動かす際の注意点	3 (1.5)

※2人以上の方が取り上げた視点を筆者がまとめたもの

一方、動作法経験者群は、「基本的な動作法の修得」や「子どもの実態把握」を挙げるものが多かった（Table 6参照）。

Table 6 具体的な研修課題（動作法経験者群）

具体的な研修課題	取り上げた人数 48 (%)
a. 基本的な動作法の修得	14 (29.2)
b. 子どもの実態把握	10 (20.8)
c. 子どものかかわり方	7 (14.6)
d. 子どもに合わせた課題の立て方	6 (12.5)
e. モデルパターンの修得	6 (12.5)
f. 授業での実践方法	3 (6.3)
g. 行動変容の評価の仕方	2 (4.1)

※2人以上の方が取り上げた視点を筆者がまとめたもの

これらから、動作法の経験が無い初心者群は、どのように授業を展開してよいか悩んでいる現状を打開するた

めに、動作法の目的や意義といった理論を知り、その上で実際の養護学校現場にどう展開していくかを研修したいと考えていることがうかがえる。

動作法経験者は、基本に立ち返り、改めて子どもの実態を把握する方法を見直しながら基本的な動作法の修得を研修したいと考えていると思われる。

また、本公開講座を受講した後に記入された、具体的な研修課題に対する達成状況を整理してみると、動作法の経験が無い初心者群では、大半が半分以上達成されたと感じている (Table 7参照)。

Table 7 具体的な研修課題の達成状況
(動作法経験の無い初心者群)

参加目的の達成度	取り上げた人数 191 (%)
a. 大部分達成	100 (52.4)
b. 半分達成	69 (36.1)
c. 手がかり程度の達成	22 (11.5)

※記入された視点を筆者がまとめたもの

一方、動作法経験者群においても、大半が半分以上達成されたと感じている (Table 8参照)。

Table 8 具体的な研修課題の達成状況
(動作法経験者群)

参加目的の達成度	取り上げた人数 68 (%)
a. 大部分達成	35 (51.5)
b. 半分達成	27 (39.7)
c. 手がかり程度の達成	6 (8.8)

※記入された視点を筆者がまとめたもの

これらから、本公開講座は、参加者の具体的な研修課題についてもおおそ達成できるような内容になっていることがうかがえる。

また、手がかり程度の達成感だったと思われるものとしては、その理由として、「用語がよく分らなかった」「実技を行う際にどのようなことばかけをしたらよいか戸惑った」「評価をどのようにしていくのがよく分らなかった」「コミュニケーションの方法がよくつかめなかった」などが挙がっていた。

これらから、動作法の経験がない初心者でも分かるようなことばで説明していくことや、実技の際のことばかけや実際のやりとりの様子をより詳しく伝えていくことが望まれていると思われる。

(3) 動作訓練内容のうち、重点的に研修したい内容と研修できた内容 (11項目から自由選択)

本公開講座を受講するに当たり、重点的に研修したい

内容について、「a.動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解」「b.保護者などのインテークと子どもの問題状況の把握」「c.課題関連図などによる子どもの問題点の見方」「d.子どもに合わせた課題の組立てと指導計画作成」「e.動作訓練のモデルパターンの援助の仕方」「f.子どものベースにあった無理のないかわり方」「g.記録の取り方と動作と行動変化の評価の仕方」「h.母親指導の進め方」「i.生活指導や集団活動などの自分の役割分担の指導方法」「j.職場での動作訓練の適用や導入の工夫」「k.ミーティングや研修会での相互啓発への参加と工夫」の11項目から自由に選択してもらったものを整理した。

動作法の経験が無い初心者群は、主に、「a.動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解」「d.子どもに合わせた課題の組立てと指導計画作成」「e.動作訓練のモデルパターンの援助の仕方」を挙げた場合が多かった (Table 9参照)。

一方、動作法経験者群については、「a.動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解」「c.課題関連図などによる子どもの問題点の見方」「d.子どもに合わせた課題の組立てと指導計画作成」「e.動作訓練のモデルパターンの援助の仕方」を挙げた場合が多かった (Table 10参照)。

Table 9 重点的研修希望
(動作法経験の無い初心者群)

具体的な研修課題	取り上げた人数 329 (%)
a. 動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解	50 (15.2)
b. 保護者などのインテークと子どもの問題状況の把握	22 (6.7)
c. 課題関連図などによる子どもの問題点の見方	39 (11.9)
d. 子どもに合わせた課題の組立てと指導計画作成	51 (15.5)
e. 動作訓練のモデルパターンの援助の仕方	59 (17.9)
f. 子どものベースにあった無理のないかわり方	38 (11.6)
g. 記録の取り方と動作と行動変化の評価の仕方	20 (6.1)
h. 母親指導の進め方	4 (1.2)
i. 生活指導や集団活動などの自分の役割分担の指導方法	6 (1.8)
j. 職場での動作訓練の適用や導入の工夫	37 (11.2)
k. ミーティングや研修会での相互啓発への参加と工夫	3 (0.9)

これらから、動作法の経験が無い初心者群も、動作法経験者群ともに、「a.動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解」「d.子どもに合わせた課題の組立てと指導計画作成」「e.動作訓練のモデルパターンの援助の

仕方」が多いことから、動作法の理論を知った上で、子どもに合った課題の組立てや指導計画の作成とともに、実際の動作法での支援の仕方を研修したいと考えていることがうかがえる。つまり、動作法での一連の指導方法を研修することで、今後の授業場面での活用を図ろうとすることが考えられる。

また、重点的に研修したい内容の11項目から、実際に研修できた内容について整理してみると、動作法の経験が無い初心者群では、主に「a.動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解」「c.課題関連図などによる子どもの問題点の見方」「e.動作訓練のモデルパターンの援助の仕方」「f.子どものペースにあった無理のないかわり方」「j.職場での動作訓練の適用や導入の工夫」が多かった（Table 11参照）。

一方、動作法経験者群でも、「a.動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解」「c.課題関連図などによる子どもの問題点の見方」「d.子どもに合わせた課題の組立てと指導計画作成」「e.動作訓練のモデルパターンの援助の仕方」「f.子どものペースにあった無理のないかわり方」が多かった（Table 12参照）。

これらから、本公開講座は、動作法の理論をもとに、子どもの問題点の見方から、子どものペースに合った動作法の援助の仕方まで、一連の指導方法について研修できるように構成されているとみられる。

その反面、保護者へのインテークの仕方や子どもの問題状況の把握、指導記録の取り方や動作と行動変化の評価の仕方などへの研修については、もう少し工夫が必要であることがうかがえる。

Table 10 重点的研修希望（動作法経験者群）

具体的な研修課題	取り上げた人数 329 (%)
a. 動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解	12 (11.6)
b. 保護者などのインテークと子どもの問題状況の把握	4 (3.9)
c. 課題関連図などによる子どもの問題点の見方	12 (11.6)
d. 子どもに合わせた課題の組立てと指導計画作成	18 (17.5)
e. 動作訓練のモデルパターンの援助の仕方	18 (17.5)
f. 子どものペースにあった無理のないかわり方	10 (9.7)
g. 記録の取り方と動作と行動変化の評価の仕方	9 (8.7)
h. 母親指導の進め方	5 (4.9)
i. 生活指導や集団活動などの自分の役割分担の指導方法	1 (1.0)
j. 職場での動作訓練の適用や導入の工夫	14 (13.6)
k. ミーティングや研修会での相互啓発への参加と工夫	0 (0.0)

Table 11 実際に研修できた内容
（動作法経験の無い初心者群）

具体的な研修課題	取り上げた人数 314 (%)
a. 動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解	50 (16.0)
b. 保護者などのインテークと子どもの問題状況の把握	17 (5.4)
c. 課題関連図などによる子どもの問題点の見方	37 (11.8)
d. 子どもに合わせた課題の組立てと指導計画作成	34 (10.8)
e. 動作訓練のモデルパターンの援助の仕方	64 (20.4)
f. 子どものペースにあった無理のないかわり方	60 (19.1)
g. 記録の取り方と動作と行動変化の評価の仕方	14 (4.4)
h. 母親指導の進め方	2 (0.6)
i. 生活指導や集団活動などの自分の役割分担の指導方法	1 (0.3)
j. 職場での動作訓練の適用や導入の工夫	32 (10.2)
k. ミーティングや研修会での相互啓発への参加と工夫	3 (1.0)

Table 12 実際に研修できた内容（動作法経験者群）

具体的な研修課題	取り上げた人数 128 (%)
a. 動作訓練の理論や他の訓練法との違いなどを理解	19 (14.8)
b. 保護者などのインテークと子どもの問題状況の把握	5 (3.9)
c. 課題関連図などによる子どもの問題点の見方	14 (10.9)
d. 子どもに合わせた課題の組立てと指導計画作成	19 (14.8)
e. 動作訓練のモデルパターンの援助の仕方	24 (18.8)
f. 子どものペースにあった無理のないかわり方	23 (18.0)
g. 記録の取り方と動作と行動変化の評価の仕方	4 (3.1)
h. 母親指導の進め方	2 (1.6)
i. 生活指導や集団活動などの自分の役割分担の指導方法	2 (1.6)
j. 職場での動作訓練の適用や導入の工夫	10 (7.8)
k. ミーティングや研修会での相互啓発への参加と工夫	6 (4.7)

IV. おわりに

本公開講座の参加者の課題意識については、動作法の経験が無い初心者は、どのように授業を展開してよいか悩んでいる現状を開示するために、動作法の目的や意義といった理論を知り、その上で実際の養護学校現場にど

う展開していくかを研修したいと考え、動作法経験者は、基本に立ち返り、改めて子どもの実態を把握する方法を見直しながら基本的な動作法の修得を研修したいと考えている。

さらに、動作法の経験が無い初心者や動作法経験者ともに、動作法での一連の指導方法を研修することで、今後の授業場面での活用を図ろうとしている。

本公開講座は、おおよそこれらの課題を達成できるような内容になっているが、指導記録の取り方や動作と行動変化の評価の仕方などへの研修については、もう少し工夫が必要である。また説明する際には、動作法の経験がない初心者でも分かるようなことばを用いたり、実技の際のことばかけや実際のやりとりの様子をより詳しく伝えたりしていくことが望まれる。

参考文献

- 1) 大神英裕 (1998) 動作訓練におけるエキスパートシステム導入の試み. リハビリテーション心理学研究, 16, 73-81.
- 2) 大野清志・村田茂 (2005) 動作法ハンドブック, 慶應義塾大学出版会.
- 3) 佐藤暁 (1996) 脳性まひ児の発達過程における動作学習の困難に関する分析. 特殊教育学研究, 34 (3), 13-22.